

青山胤通家関連文書(1)

青山文書の会

国立科学博物館所蔵の青山胤通家^{たねみち}関連文書130通を順天堂大学医学部医史学研究室に於いて解読したので5回に分けて掲載する。男爵 青山胤通は明治15年東大医学部を卒業し欧州へ留学。20年帰国後帝国大学医科大学の初代内科教授に就任。ペストの研究等に従事し、当時「青山内科」として入澤達吉ほか多くの人材を輩出した。明治天皇ご危篤の際拝診した。本書に掲載した書簡は医学者のほか政治家や官僚等の書簡がありその交際範囲の広い事を窺わせる。本会会員は安倍晶子・岩崎鐵志・斎藤美栄子・斉藤陽子・酒井シヅ・佐藤ミホ子・須永忠・深瀬泰旦・増淵和代・山口静子である。(文責須永)

青山胤通は明治・大正期の内科医学者。安政6年美濃苗木藩遠山藩主の江戸下屋敷に生まれる。明治15年東大医学部卒業。翌年ドイツへ留学。20年帰国。帝国大学医科大学初代内科学教授。27年6月より8月迄ペスト研究の為香港へ出張。ペストに罹患し九死に一生を得る。34年より大正6年8月迄東京帝国大学医科大学々長。36年より37年にかけて欧州・米国視察旅行に出掛ける。明治天皇ご危篤の際三浦謹之助、岡玄卿と共に拝診した。大正元年内務省御用掛となり大正天皇の侍医。6年男爵位授爵。同年12月23日食道癌にて没。享年59。(1859-1917)

[1] 青山孝子の書簡

青山孝子は青山胤通の妻。慶応4年2月小林好愛の長女として生まれる。明治24年4月長女芳、36年7月次女 通子を産み育てる。昭和20年7月没。享年78。(1868-1945)

1 明治27年(8)月 日 (119号)

(封筒表) 青山胤通様

(封筒裏) 留守宅より

其後は如何被為渡候やと此地之酷暑にくらべ御地ハ嘸かし非常之事と存日々御案じ申上候のミ、只折々宮本氏⁽¹⁾より御一同御替りなき由御報伺ひ安心致居、新聞之うへにてハ御取調も万事御都合よく相運び、本月上旬にハ御帰朝之途に御付きのよ

ふ書のせ候、之実ニ悦ばしく存居候処へ思ひがけなき御病氣之電報にて実ニ愕き、いかになさんと途方にくれ申候、宅へは見舞人引きりなく大混雑ニて小林父日々つめきり居申候、最初之御報知にてはとても御目にもかゝられぬ事と存、只々なみだにくれ候のミ、実ニ心細く存候いしが其後度々之電報にて先御快復之見込ありとの御様子伺ひ、いきかへりたる心地いたし申候、北里氏⁽²⁾初皆々居られ候故御手当ハ十分之事とハ存候得とも、定めて何かにつけ御不自由之事と存、手なれたる看護人にてもし向け度と心配いたし候処、其辺も決して心配無之と衛生局より御申越しにて安心致候、何卒々々御大切に御養生被遊一日も早く御全快目出度御帰朝待居候、当地一同無事取わけよし坊⁽³⁾は少しの障りもなく機元よく日々大あばれにて(おとうちやんと日光へ鮎をたべに行のだ)と申居、御帰り待居候、此頃写し候写真御なぐさみに御送り申上候、大そう成長いたし候間御覧可被下候、便船にまかせ御病床中洋服にてハ御不自由と存候間、ゆかた二三枚御送り申上候、いろいろ申上度存候へ共余りの驚きにまだ胸も静まり不申、思ふ半分認メ兼、右あらあら申上候、余ハ小林父より可申上候、めて度かしこ
胤通様 御もとに こふ子 拝

(1) 宮本氏 宮本叔^{はじめ}。青山胤通の部下で、明治27年香港ペスト調査の為青山に随行。詳細

は同氏の書簡の項に記す。

- (2) 北里氏 北里柴三郎. この時同氏も香港へ赴く. 詳細は同氏の書簡の項に記す.
- (3) よし坊 長女 芳の事. この時4歳. (数え年. 本文書で享年の表記は昭和24年5月24日以前死没した人は数え年, 以後の人は満年齢とした)

[2] 青山胤通^{たねみち}の書簡(下書き原稿)

1 明治 年 月 日 (1号)

(封筒表) 水道橋税務署 御中

(封筒裏) 青山胤通

拝呈, 御通知書敬読仕候には, 第三種所得税申告書中診察料ハ他ト比較シ少額ヲ以旨意御申越相成候へ共, 他ノ所得税ハ承知不仕候共恐ク我大学同僚者ノ診察料ニ比シ少額ナルコトヲ指示セラレ候ものも右候へ共, 小生ハ他ニ比シ殊ニ公務多端にして所謂ル内職ハ甚タ少ナク候, 他ヨリ見ル如キ収入無之候, 之ヲ数字ニ現ハセバ左ノ通り

入+出=0

右御回答迄, 拜白 青山胤通
税務署 御中

(書簡の下書き)

2 明治 年 月 日 (118号)

拝呈, 過日決議いたし候勅令明廿六日より御施行相成候旨内務大臣ヨリ御諮問相成候間, 過日議席に於テ申述候愚考, 尚ホ一応左ニ縷述申候, 此度支那に流行いたし候「ペスト」ハ只今迄の処該国の一小局部ニ限り其疫ニ罹ルモノハ概シテ貧困の労働者ニ多ク, 未ダ広く蔓延の様無之, 且ツ我国衛生上の状態ニ於テモ容易ニ輸入いたし候様子不有之ニ該地方より来ル船舶に検疫ヲ施行スルハ万一ニ該疫の輸入を防止セントスルの意なれども, 我国ニ於テ只今迄船舶検疫を行ひ外国より来ル伝染病「コレラ」を防ぎ得タル例有之候哉, 未ダ嘗テ聞ザル処ニ候, 蓋シ其船舶, 検疫の全ク無効ナルニ非ズ, 其施行の方法及ビ検疫医の宜シカラザルの故ト存候, 此不完全ナル検疫法ヲ「ペスト」ニ適用スルモ大ひに效ヲ奏スル哉, 甚ダ疑ひ

惑ふ処ニ候, 又前述セシ如ク「ペスト」ハ一小地方部に於テ一定の民級に其猛力ヲ及ボスノミニシテ未ダ広く蔓延いたさず, 且ツ現今我国衛生上の状態容易ニ其輸入ヲ許ササル有様ナルニ, 明日より勅令御発布相成ルハ大早計ニ非ザルカ, 右ハ交通貿易上一ト方ナラザル關係ヲ有スルコト故該令施行の期日ハ御延引相成候様仕度, 愚考如斯, 敬白

青山胤通

中央衛生会会長⁽¹⁾長與專齋殿

(書簡の下書き)

- (1) 中央衛生会会長 長與專齋は明治23年8月より35年6月迄中央衛生会会長を勤める。

[3] 青山正幹?

本書簡には発・受信人名がないが, その内容より青山景通^{かげみち}(平田篤胤の門人)の次男正幹が3男胤通に宛てた書簡と思われる。本文中の兄上とは父青山景通の長男直通で, 明治2年美濃苗木藩大参事として厳格に廃仏毀釈を実行した為住民の反感を買い屋敷を焼かれ追放され, 分家して易断家となる。次男正幹は富山県の官吏。青山家は3男胤通が継いだ。

1 明治 年 月 日 (117号)

謹呈, 御兄上様卒然御死去相成候段実ニ驚入申候, 御生前中ハ不行届にて不和ニ相過キ候へ共, 近日の内ニ融和の途相立チ可申希望有之候処, 不慮の事にて其事の果サズ実ニ遺憾千万ニ候, 又御姉上様の御心中深く御察シ申上候

[4] 赤羽四郎の書簡

赤羽四郎は安政2年会津藩士家に生まれ, 戊辰戦争に参加後アメリカに留学。帰国後一時東大予備門教諭を務めた後に外交官の道を歩み, 日露戦争時スペイン公使としてロシアバルチック艦隊の動静を報知し功績があった。明治43年没。享年56。(1855-1910)

1 明治40年11月17日 (63号)

(封筒表) 市内本郷町町二丁目三十四

青山胤通殿

（消印 本郷・40・11・18・前9-10）

（封筒裏）ㇿ 市内芝区伊皿子町五十三

赤羽四郎（切手3銭）

拝啓、陳は来ル廿二日金曜日午後一、二時頃より烏森町濱之家ニ於て頭山翁⁽¹⁾囲碁会相催候間、御枉臨願度由有之候、電話にて日曜日と申上置候へ共、右ハ金曜日ニ切揚ケ候事にて有之候、右為念申上候也、敬具

十一月十七日

弟 四郎

青山兄閣下

法、本年ニ於て篤志者之出資を得て若干床実いたし度（約言スレバ施療患者之資金寄附也）付ては医科大学医院ニ之を御托し申候得は、一病人ニ付每一日何許之金を要候や、又之を御托申候へは御引受相成候や、其辺之逐一御問合いたし度、誰え申込候てよろしきか為御知被下、其当局者え可相成は御一言被下度相願候、いつれ不日参堂可相願も先以て書中願置候也

三十九年一月十五日

石黒忠恵

医科大学長 青山博士 閣下

（注）この時石黒忠恵は日本赤十字名誉社員。

- (1) 頭山満^{とうやまみつる} 安政2年福岡藩士家に生まれる。明治・大正・昭和期の国家主義者。支洋社の総帥として右翼団体を取り纏め、アジアの民族主義者・独立運動家（中国の孫文・蒋介石、韓国の金玉均、インドのビハリ・ボース等）の支援を行う。又犬養毅・広田弘毅・吉野作造・大杉栄等との繋がりを持つ。昭和19年没。享年90。（1855-1944）

[5] 石黒忠恵^{ただのり}の書簡

石黒忠恵は弘化2年奥州伊達郡梁川の代官家に生まれる。佐倉順天堂に学ぶ。明治4年松本良順の勧めにより兵部省軍医寮に出仕。以後陸軍軍医制度・医学教育制度の確立に尽力。陸軍軍医総監・陸軍省医務局長・日本赤十字社長歴任。子爵。昭和16年没。享年97。（1845-1941）

1 明治39年1月15日 (70号)

（封筒表）市中本郷区帝国大学医科大学内科にて

青山学長殿 御直披

（封筒裏）ㇿ 石黒忠恵

（楕円形印 印薄く判読不能）

（消印 本郷39・□・16）

本文ニ当る施療患者每一病者ニ付一ケ年ニ要候金額、可相成は大凡にてよろしく候間、当局者より郵知被下度相願候

益御多祥奉賀候、然は老生年来之宿志なる救済病牀、則ち病床を造り、其毎個ニ金を付し、之を病院ニ托し貧病者をして就て治療を受けしむる方

2 明治39年6月10日 (69号)

（封筒表）市内本郷区本郷弓町

青山医学博士殿 御直披

（消印39・6・10）（切手3銭）

（封筒裏）ㇿ 石黒忠恵（石黒忠恵の印）

（消印39・6・11）

昨夜は失礼申候、其節御嘶候岩佐純君之事

御一新之最初、朝野とも惣て英学を主張し殊更英医を聘雇しあるにも不拘、相良知安と兩人にて（其下手ッ子にはそりや長谷川か居たにもせよ）〔此段宜敷〕独逸医学の輸入を首唱し万難を排して遂ニ独逸教師、独逸留学を始め、以て今日医学の礎を置きたる事

といふ一事ニ候、此事ニ付ては相良の剛張と岩佐の婦人的忍耐にて成効候は不可争功能ニ被存候、右之段御聞ニ入度と相認奉置候、宜敷奉願上候

三九 六月十夜

忠恵拜

青山博士様

二白、自分達ニハさ程不感も華族には（殊更金も家も立派ニ持ち居候人には）なり度きものと相見へ医界にも一人ならず二人三人四人と熱望者ありて各方面え運動され候には驚入申候

3 明治44年9月25日 (71号)

（封筒表）市中本郷区弓町 青山医学博士殿

御直

（消印 44・9・25）

（封筒裏）ㇿ 石黒忠恵

（楕円形印 石黒・東京市牛込区揚場町十七番地）

(消印 本郷 44・9・25)

先日は藤田嗣章⁽¹⁾ 拜語之義願上候処、御帰京早々御多忙之処御差繰ゆるゆる御懇語被下、当人大悦にて報知、小生よりも厚く御礼申上候、朝鮮之病院も随分六ヶ敷相成居候処、藤田大尽身ニ候、先比は貴重なる地所等をも其有となし、院務も段々緒ニ就き候趣ニ候間、此処基礎を確かめ候て可相成早く後進者え可渡など相談相勧め申候、先は右御礼申上候、謹具

四四 九月二十五日

忠恵

青山博士様 侍史

よければせハせハと勉め、此暑中ニも隔日ニ朝より夕迄赤十字社へ参り帳簿⁽²⁾なと関し整理罷在候、況や五十の貴君をや、況や前途大多之真ニ為すへき事あり又世の囑望ある貴君をや、実ハ国家之前途ニ大勇猛心ある人鮮きを大ニ憂居候、老生特ニ貴君の健康を禱り候故、例のいらぬヘラヅロと御嘲笑可有之は覚悟之此ニ一書奉呈候、謹言

大正六年八月六日午後

忠恵

青山博士様 侍史

二白、娘、わか婆いろいろ御厚配恭謝候、其令夫人閣下へよろしく御礼声奉希候

- (1) 藤田嗣章^{つぐあきら} 明治・大正期の陸軍軍医。明治42年3月大韓医院長就任。其後森林太郎の後任として大正元年9月より3年8月迄陸軍軍医総監を勤める。嘉永7年生まれ。昭和16年。享年88。(1854-1941) 画家の藤田嗣治^{はる}は彼の次男。

4 大正6年8月6日 (68号)

(封筒表) 信州軽井沢駅 元宿別荘地之

青山医学博士殿 親披 不煩貴酬

(消印 牛込6・8・□・□)

(消印 軽井沢・6・8・8・前0-6) (3銭切手)

(封筒裏) 東京市 石黒忠恵

(丸印 石黒・東京市牛込区揚場町十七番地)

先般来御病気と之事森鷗外君より承り、其節無程御地へ御転と之事、其後大隈家え参候友人も帰途訪問話様、唯今大隈家より軽井沢へ遣候者歸り之者之報告中青山博士之事ニ及び、軽井沢へ被転候後ハメッキリよろしくと(の)事を傍ニ在て聞け候との事故順次御快方之事と存居候処、昨日愚娘より手紙之端ニ青山先生もまた常之如く外出ニも不可成と有之、さスレバます全然御快方ニは無之やと被存候て此ニ尚御案申上候、療治ハ寸毫無御油断事ニ付、只々精神上の御強くを専念候、今日我国之現況尚も有為之士ハ老少ニ無別、チト自分見解ヤウナレトモ、頗る前途跡之不安之今日ニ付、いかか被成候ても御全快可被成との確き御確信を専念候、老生なと七十三ニ候得共、又近年ハ腸わるく折々傷められ目方三貫も減候得共少しく

5 大正6年9月14日 (120号)

(封筒表) 市中本郷区弓町 青山医学博士殿 侍曹

(消印 牛込・6・9・15・后1-2) (切手3銭)

(封筒裏) 男爵 石黒忠恵

(楕円形印 石黒・東京市牛込区揚場町十七番地)

(消印 本郷・6・9・15・后3-4)

老生関西へ参居本日帰京候処、去月一日学長御辞任聴許之事敬承、永々御尽瘁御在職中ハ軍医学生之為め不少御配意候段旁に敬謝仕候、先般来之御病気ハもはや御順快ニは可有之も尚十分御静養為尽度専禱候、いつれ拜芝可申上も此ニ敬意を表候、謹具

大正六年九月十四日

石黒忠恵

青山医学博士殿 坐下

必不煩貴酬

[6] 犬養毅^{いぬかいつよし}の書簡

犬養毅は安政2年備中庭瀬藩士家に生まれ、慶應義塾に学び、郵便報知新聞記者として活躍。明治15年立憲改進黨の結成に参加、23年の総選挙で当選。以後連続当選し憲政の神様とも呼ばれた。昭和6年総理大臣となるが7年、所謂5・15事件で暗殺される。享年78。(1855-1932)

1 明治・大正 年12月29日 (121号)

(封筒表) 青山胤通殿 紹介 柏原文太郎君

(封筒裏) 東京市牛込区馬場下町卅五番地

犬養毅 (ゴム印)

拜啓、此ニ紹介致候友人柏原文太郎氏⁽¹⁾ 老母御診

察被下度相願候也

十二月廿九日
青山博士 侍曹

犬養毅

〔1〕柏原文太郎 明治・大正・昭和期の教育家・社会事業家。東亜同文会の設立に参加。犬養毅の許で立憲国民党より立候補し衆議院議員を勤める。

〔7〕井上馨^{かおる}の書簡

井上馨は天保6年長州萩藩士家に生まれ、攘夷急進派として活躍。維新後大蔵大輔・外務卿・農商務・内務大臣等を歴任し明治期元老の役割を果たす。侯爵。大正4年没。享年81。（1835-1915）

1 明治45年7月26日 (122号)

〔封筒表〕本郷区弓町二丁目三十四番地

博士 青山胤通殿 必親展

〔封筒裏〕緘 井上馨

前略、過刻は陛下御容膝御披言拜聴候て少シ安全を生ジ申候、尔後別室にて御話し申上候西瓜之件ニ付送書を差出し可申と申上置候分、則別紙之通ニ御坐候、御一読被成下度、且実檢モ少々有之候故御取計相願候、併上品之西瓜を要シ候事右心当り之場所夫々探知仕居申候、先は右用事迄呈寸楮候、勿々拜白

七月廿六日 馨
青山胤通殿

〔8〕井上毅^{こわし}の書簡

井上毅は明治国家形成の基礎を作った法政家。天保14年熊本藩士家に生まれ。明治4年岩倉遣外使節団随員として参加、フランスの司法・行政を学ぶ。司法四部作を著して司法制度の近代化に貢献。又14年の政変、内閣制度の創設に関与し、明治憲法・皇室典範を起草した。明治28年没。子爵。享年52。（1844-1895）

1 明治 年5月31日 (64号)

拜啓、明一日午後七時晚餐さし上度候間、御差支無之候ハ、官邸へ御光来被下度、此段貴答相待

候也

五月三十一日
青山教授殿

井上毅

〔9〕井上通泰^{みちやす}の書簡

井上通泰は慶応2年1月2日に姫路に生まれる。柳田国男、松岡映丘の兄。明治23年東大医学部卒業。26年兵庫県立姫路病院眼科部長。のちに副院長。岡山の第3高等学校医学部教授を35年迄勤め、同年東京で眼科医院を開業した。和歌を松波資之^{すけゆき}に学び、森鷗外らと交わる。のち宮中顧問官。40年に御歌所寄人。貴族院議員。芸術院会員。37年9月14日に東京帝国大学医学部より、「レウマチス性結膜下組織炎ニ就テ」で医学博士の称号を授与される。昭和16年8月15日没。享年76。（1866-1941）

1 明治34年11月18日 (67号)

〔封筒表〕東京本郷区弓町 青山胤通様

〔封筒裏〕 岡山三番町 井上通泰

（消印 東京34・11・20・前4）

其後ハ御不沙汰仕候、益御清健の御事と存候、此間近著二篇差上候、御落手被下候事と存候、九州に医科大学⁽¹⁾が出来るといふこと頻に新聞に見え候、若愈設立と相定まり候ハ、此度は是非御推薦被下候様呉々願上候、実は先年来事皆志とたがひ候故時としては断然たる処置に及ばむかとも存候事もあれど、先輩諸氏に誠められて碌々日を送りをり候、若今回幸に御尽力を蒙候て桂林の一枝を折ることを得ば長く御高恩を記し可申候、賀古君⁽²⁾にも昨春久々にて面会の節「イラツナ、短気ヲ出スナ」とくれぐれ誠められ候故、心の静まり候迄はと存候て手紙もおくらず不沙汰致居候、御序よろしく御つたへ被下度、尊下よりもいっぞやイラツナとの御論あり、十分服膺は致居時ニ心の静まりをり候事もあれども、又顧ミれば日本の眼科医にて官費又は私費にて洋行のもの既に数十名に相及び（現に在欧の知人にて七人あり）小生と同時の卒業の眼科医に洋行せざるものなく、又当地附近の眼科医（学士たち）にも洋行せざるものなく、弊社卒業の眼科医の洋行せるもの

も既に三四人に及び候、これ等の人に対して依然アウトリテート⁽³⁾を保つが為には心神を損ふ迄に刻苦せざるを得ず、おふけなき申分なれど今日本の眼科医中小生ほど読書勉強いたし候ものは有之間敷候、しかも時運未至らずいらゝくざらむと思ふとも叶はざる所に御坐候、何卒衷情御察し被下候て御配慮被下度願上候、尤洋行だけならば早晚弊校より出来るかも知れぬ、弊校には事情ありてクリニッケルの留学は当県の地方税よりする事なれば好ましからぬ事に御坐候、世に処するは今三四十年のミ名を後代に残すはあながち斯道に限るべからず、斯道果して荆棘多くんば乃去て他の坦々たるものに就かむかなども考へ候事ありて、念煩悶致候事も有之候、呉々目下の境遇を御高察被下度候、乍筆末御令室様によろしく御伝へ被下度

十一月十八日夜 井上生
青山先生 御もとへ

- (1) 明治33年に九州と東北に帝国大学設置案が出されたが、35年予算が採れず却下された。依って地元より寄附の働き掛けにより36年京都帝国大学福岡医科大学が設置された。九州帝国大学が発足するのは44年の事である。
- (2) 賀古君 賀古鶴所の事。耳科医師。詳細は同氏書簡の項に記す。
- (3) アウトリテート オーソリティ。権威。

2 明治35年4月12日 (66号)

(封筒表) 東京本郷区弓町 青山胤通様 親展
(消印 備前岡山・卅五年四月十二日) (切手3銭)
(封筒裏) 〆 岡山三番町 井上通泰
(消印 □・4・14)

拜啓、帰岡後早速書状奉呈答ニ候処、留守中用事相ツモリ候為本日迄延引致候、右不悪被思召度候、去二日拜訪ノ節ハ将来ノ方針等ニ付高教ヲ乞ヒ且ハ愚案ヲ陳ズベキ考ナリシ処、立寄候先々ニテ饗応ヲ相受候内泥酔ニ及ビ拜訪ノ比ニハ既ニ殆前後ヲモ弁ヘズ、定メテ失礼ノミ相ハタラキ候事ト存候、例ノ江海ノ御洪量ヲ以テ御容赦被成下

度、サテ上京勿々マヅ彼流言ノ源ヲ極メ并セテ某々が流言ヲ利用セシ次第ヲモ究メ、二三子ノ心胆ヲ寒カラシメ申候、次ニ帰京開業ノ資金ヲ工夫致候処、是亦意ノ如ク相運ビ候ニ付本年中ニハ帰京仕、専門的ノ伎倆ヲ揮ヒテ彼二三子ニ示シ候ト共ニ医政上ニモ驥尾ニ付シテ一飛躍可致候、何卒此後モ御眷顧被下度、但帰京開業ノ事ハ彼人ニ相知レ候テハ妨害相生ジ候オソレ有之候ニ付今シバラク御秘シオキ被下度、河本先生ハ類ニ神戸ニテ一旗上ゲ候ヤウ御ス、メ被下候、呵々、奥様御嬢様ニ宜ク御伝へ被下度、家内ヨリモ呉々申出候
四月十二日夜 麟生⁽¹⁾拜
青山先生 御もとへ

- (1) 麟生 井上通泰の事。

3 明治35年5月18日 (65号)

(封筒表) 東京本郷区弓町 青山胤通様 必親展
(封筒裏) 〆 岡山三番町 井上通泰
(消印 35・5・20)

(内封筒表) 御内覧

(内封筒裏) 〆

内啓仕候、此度帰京仕候ニツイテハ某氏ヨリ資本取出候約束出来候処、資本主ノ申候ニハ是非学位ヲ取レ、其上ニテ資本ヲ出シテヤルト申候、サラズトモ開業仕候ニハ学位ノ有無大ニ関係致候事ナレバ、何卒此度学位相受度望ニ御座候、然ルニ貴大学ニテハ到底成効ノ望無之候ニ付、京都ノ某教授ト相談ノ上同大学へ請求仕候(尤コレハ極メテ秘密ニ致居候事ニ候間、貴大学ノ某氏等へハワケテ秘密ニナシオキ被下度)然ルニ幸ニ五六人熱心ニ賛成致シクセラレ候人アリテ大分形勢宜ク候ヘドモ、今両三人ノ賛成無之候テハ全員ノ三分二ニ達シ不申候、殊ニ坪井⁽¹⁾、笠原⁽²⁾ニ氏ノ向背未明ナラズコレガ為ニ苦慮罷在候、毎々様々ノ御迷惑相カケオソレ入候ヘドモ此度ガ最後ノ願ニ候間、何トカ両氏へ御頼遣被下間敷歟、殊ニ笠原氏ハ貴台ノ御門人ナレバ貴台ノ御一言ハ九鼎ヨリ重カルベク存候、万々一此挙ニ失敗致候ハ東京ヘモ帰ラレズ、サリトテ当地ニハフリタカラズ、進退惟谷事ニ御座候ヘバ、此度ニ限り特別ノ思召ヲ以テ

輒鮎ノ急ヲ御救被下候様奉懇願候、尚々右会議ハ今週中ニ即チ十九日ヨリ廿六日迄ノ間ニ開カレ候由内報有之候ニ付、御多用中オソレ入候ヘドモ（若御聞届被下候ハゞ）至急ニ御申遣被下度奉願上候

五月十八日 麟生
青山先生 御許 御覧後必御火中被下度

- (1) 坪井 坪井次郎。文久元年7月生まれ。坪井信道の孫、為春の子。明治18年東大医学部卒業。教授緒方正規の助手となり細菌学の研究に従事する。23年9月衛生学研究のためドイツに留学。京都帝大医科大学衛生学教授となりのち明治32年同大医科大学長。明治36年7月12日没。享年43。（1861-1903）
- (2) 笠原 笠原光興。文久元年生まれ。明治21年帝大医科大学卒業。32年京都帝大内科学教授。青山胤通の弟子。大正2年1月28日没。享年53。（1861-1913）

[10] 入澤達吉の書簡

入澤達吉は慶応元年1月5日越後国南蒲原郡今町に生まれる。明治22年1月帝大医科大学卒業。ベルツの助手となる。23年3月ドイツに留学する。34年より大正14年まで同大学内科教授。その間宮内省御用掛、同大医学部長、侍医頭、東京医学会会頭等を勤める。昭和13年11月8日没。享年74。（1865-1938）

1 明治38年9月1日 (72号)

(封筒表) 本郷区弓町二丁目三十四
青山胤通殿 親展

(封筒裏) 九月一日

東京市□□町四十番地 入澤達吉（ゴム印）
(消印 38・9・2)

拝啓陳は講和談判⁽¹⁾愈成立致候趣御座候処日本ノ要求ハ其主眼を没了シ加之他ノ点に於テモ甚シク削減セラレ実ニ予想外の不結果茫然自失の外無御座候御子言のルーズヴェルト⁽²⁾ガ勝者の頭を押へ候程度も余り過酷にて今更驚入申候。近着ノ独乙新聞に抛レバ過般独露両帝の会見ハ独帝より会

見を求メタルモノト見エ候故ルーズヴェルトの外ニウィルヘルム⁽³⁾モ必ず此ノ講和ニ干係致候事世評ノ申候如くあらむト存じ候。事実ハ如何に候哉兎ニ角三国干渉の当時ニ比して日本ハ更ニ一段器量を下ゲ候事ト奉存」其代り藩閥ハ是レ限りにて滅絶可致歟如何。日本ハ財政上今後破産ニ至ラザレバ幸ナリト奉存候。何人も内閣を引き受けるモノ無キニ至ルモ亦ター奇観ト奉存候何れ拜眉御高説承り可申候得共余りの事ニ呆れ申候俣右一句申上度如此御座候頓首

九月一日 入澤達吉
青山先生 侍史

- (1) 講和談判 日露戦争終結の講和談判をさす。明治38年8月10日からアメリカのポーツマスで開始され、9月5日に調印された。
- (2) ルーズヴェルト アメリカ合衆国第26代大統領。Theodore Roosevelt。日露戦争の終結にあたってハーバード大学時代の旧友である金子堅太郎との交誼でその斡旋にあたった。（1858-1919）
- (3) ウィルヘルム ドイツ帝国国王ヴィルヘルム2世。Friedrich W. Viktor Albert Wilhelm。在位1888-1918。（1859-1941）

(注) 本書簡は発信者自身による句点や括弧が施されているので直さず。当時の書簡としては珍しい例である。

2 明治39年6月24日 (73号)

(封筒表) 日本、東京、本郷区弓町二丁目
三十四番地 青山胤通殿 親展
(書留) (消印 39・7・□・后3-4)

(封筒裏) 緘 六月二十四日朝

清国南京中正街 悦生公司ニテ 入澤達吉
拝啓、陳は向暑之砌愈御安泰奉賀候、扱小生御地出発後去ル二十日上海着仕候、偶々盛宣懷氏⁽¹⁾病氣にて日本領事を介して診を請ハレ候故、早速其需ニ応じ同夜半、解纜の招商局汽船に投じ揚子江を遡り申候、二十二日朝下関ト申す処ニ着シ上陸致候、日本領事館南京分館員及周総督⁽²⁾の使者出迎居候、此処より二里斗馬車にて南京ニ入り申

候、其前日領事館員周総督ニ面会打合致候処にて
 到着の日の午後位ニ早速受診の都合ニ相成居候由
 故、到着の旨を先方ニ通じ返事を待受居候処、総
 督より今日ハ都合有之候故明日ニ延バシ呉候様申
 参り、即ち承諾之趣回答致置候、然る処翌朝即ち
 昨日午前先ヅ通訳官参り後ち李鳳年ト申す代理
 (総督の)参り、病人ハ昨日昼頃より頓ニ瀕死の
 状態ニ陥り候故受診を遠慮致候処、昨夜遂ニ死去
 致候次第云々申述候始末にて、折角此処まで参り
 誠ニ遺憾ニ御坐候得共致シ方無之候、依て一兩日
 中に此地出発上海まで帰り便船次第帰朝可仕奉存
 候、或ハ上海ニ四五日逗留致しソレより長崎ニ上
 陸、福岡・京都等見物帰京可仕哉トモ考居候得
 共、是レハ唯今は未確定に御坐候、南京より漢口
 へハ猶二日余揚子江を遡りたるに御坐候、遊意も
 動き候得共、漢口より北京へノ鉄道(一週間一回
 急行アリ、是レハ三十六(時)間ニテ相達し申候
 由)ハ数日前黄河氾濫之為破壊し一ヶ月位ハ不通
 の由に御坐候故漢口行も見合可申奉存候、先ハ右
 顛末申上度諸公え宜敷御鶴声可被下相願上候、
 草々頓首

三十九年六月二十四日朝 南京にて入澤達吉
 東京 青山先生 侍史

- (1) 盛宣懷 中国清末の官僚資本家。江蘇省武
 進県の人。洋務運動の時期に李鴻章の部下と
 して海運、鉄道、製鉄、鉱山、銀行、紡織な
 どの新式企業をつぎつぎと手がけ、巨大な富
 を築いた。又工部左侍郎、郵伝部侍郎、郵伝
 部尚書を経て、郵伝部大臣に就任。辛亥革命
 により失脚、日本に亡命したが後帰国した。

(1844-1916)

- (2) 周総督 周馥。Zhou Fu. 清末の官僚。安
 徽省建徳出身。李鴻章の幕僚を務め、直隸按
 察使、両江総督、両広総督を歴任。(1837-
 1921)

(注) 入澤達吉は同仁会設立の当時、中国の官
 僚に診察を依頼された事情を次のように回想
 している。「両江総督の周馥といふ人の令息
 学海といふ人が病気なので、領事から外務省
 を経て文部省へ依頼になって、それで診察に

行くやうな事になった。(中略)上海で数時
 間船を待つ時間があつた内に、領事からの依
 頼で盛宣懷といふ人が病気で是非診療して呉
 れと頼まれた。肺が悪いといふ病気で日本へ
 転地療養を奨めた。(中略)総督からは非数
 日滞在して、いろいろ医事衛生のことに付て
 尋ねたい。此息子さんが自分は官吏であるけ
 れども、非常に医事の事に熱心であつて、自
 分が出版した医者 of 書物が六十巻もあるか
 ら、是は遺物として進上するから日本へ持つ
 て帰つて呉といふ話でありました。」

入澤が最初に治療を頼まれた周学海はたし
 かにこの話のように歴大な『周氏医学叢書』
 の編刊で知られている。また盛宣懷は有名な
 実業家で、清末に日本へ実状視察に行ったあ
 と、「考察日本報告」で日中の経済提携を語つ
 ている。

3 大正6年8月15日 (123号)

(封筒表) (長) 野県軽井沢 青山胤通殿 侍史

(消印 軽井沢6・8・16・后3-6)

(封筒裏) 相州葉山 入澤達吉

拜啓、過日は罷出御邪魔申上候、扱既ニ御覽に相
 成居哉も難計候得共、エムスラン及アイシア之記
 事各一冊拜呈仕候間、御叱留被下度候、時節柄折
 角御自重専一奉祈候、草々頓首

六、八、一五 葉山にて 入澤達吉

青山先生 侍史

4 大正7年2月14日 (74号)

(封筒表) 本郷区弓町二丁目二十六

青山徹蔵様 侍史

(消印 7・2・15) (切手3銭)

(封筒裏) 東京市本郷区金助町一番地

入澤達吉 (角印)

拜啓、陳は今日ハ故御尊父様の御遺物及御写真御
 恵贈を辱ふし御芳情難有奉謝候、不取敢以書中右
 御礼申上候、草々頓首

七年二月十四日

入澤達吉

青山徹蔵様⁽¹⁾ 貴下

(1) 青山徹蔵 大正・昭和期の外科医。長野県出身。医師熊谷陸蔵の次男として明治15年生まれる。明治39年東京帝大医科大学卒業。泉橋慈善病院外科医長・帝大講師。43年青山胤通の養嗣子となり長女 芳と結婚。大正14年より昭和11年迄東京帝大外科教授。昭和28年没。享年70。（1882-1953）

[11] 江木^{まこと}衷の書簡

江木衷は安政5年岩国藩に生まれる。明治17年東大法学部卒業。司法省・農商務省・外務省・内務省の秘書官・参事官を務める。日本に於ける最初の弁護士之一人。大正14年没。享年68。（1858-1925）

1 明治43年4月25日 (76号)
 (封筒表) 本郷区。弓町。二丁目。三四。
 青山博士大人閣下 親展 江木衷
 (消印 43・4・26)

(封筒裏) (印) □緘□馳 ㊦三押
 庚戌四月念五日拜謹
 拜啓、先日ハ飛んでもなき事から御心配相掛候趣恐縮千万也、余リニ馬鹿気タ捏造ノ風評ハ何人モ信スル者ハ有ルマジト安神シ居ルカ吾々ノ平素ノ態度ナレドモ、夫レ迄ニ至ラヌカ所謂世ノ中ノ程度トモ可申歟ニヤ、コンナ事ニテ御耳ニ入レ候者モ有之候由、只々馬鹿気タ事ト申スヨリ外ハ無之候得共、婦人ハ又角別ニテコンナ事カラ自分ヲ中傷スル者アリト確信ノ結果ヒステリーヲ起シ、又々先生之御厄介ヲ煩ハサンカト存候処今朝ヨリ是モ平愈^(ママ)、漸ク安神仕候、兎ニ角世ノ中ノ俗物ハ吾々ノ心ヲ以テ之ヲ推スコト能ハサルコトヲ実験仕候、其中御都合相伺一夕之高聲ニ接し度ト存候得共、不取敢右御報迄、頓首

四月念五 衷 拜謹
 青山先生大人 侍史

2 明治 年 月 26日 (75号)
 (封筒表) 青山博士大人殿 江木
 (封筒裏) ㊦
 拜啓、今日正午後四時より南二十二番小林米珂⁽¹⁾

方ニ於テ例ノ公益委員会開会候ニ付、委員かたより御出席被下度と申来候、久振之御出席願上候
 二十六日 衷□□
 青山博士大人殿

(1) 小林米珂 英国法律顧問・弁護士。英国子爵ニコラ・デ・ベッカーの3男で、J. E. デ・ベッカー。1863（文久3年）生まれ。明治20年来日、24年日本に帰化し小林南峯の養子となる。シーメンス事件でドイツ側弁護士として活躍。没年不詳

[12] 尾崎行雄の書簡

尾崎行雄は政党政治家。安政5年相模国又野村（相模原市）に生まれる。日本の議会政治の黎明期より昭和28年迄衆議院議員を63年勤め憲政の神様と云われる。昭和29年没。享年95。（1858-1954）

1 明治・大正 年9月4日 (124号)
 (封筒表) 本郷、弓町ニノ三四 青山胤通殿
 (封筒裏) 封 東京品川東海寺跡 尾崎行雄
 拜啓、尔后御無音御容赦被下度候、過日ハ軽井澤御休養先にて豚児の病氣を御診察被下御蔭を以て直ちに快方に向ひ候段難有奉謝候、不取敢御礼のしるしまでに一書謹呈仕候、草々不尽
 九月四日 行雄
 青山博士殿

[13] 賀古^{かこつるど}鶴所の書簡

明治・大正期の耳科医師。安政2年遠江浜松藩藩医賀古公斎の長男として生まれる。明治14年東大医学部卒業。同期には森林太郎（鷗外）・江口襄・菊池常三郎・小池正直・三浦守治・谷口謙・佐藤佐・中濱東一郎等優れた人物がいる。21年山県有朋に同行、ドイツにて耳鼻咽喉学を修め、翌年帰国。25年神田小川町にて「賀古耳科院」を軍医兼務にて開業。27年青山胤通が香港でペストに罹患した際、文部省の依頼で賀古（神田小川町）が青山留守宅（神田裏猿楽町）へ知らせた。37年山県有朋の命により日露戦争に従軍した。

39年山県有朋の支援を得て森鷗外・井上通泰・佐々木信綱等と短歌の会「常磐会」を興す。森鷗外より最も信頼され、その遺言状を託された。昭和6年1月1日脳溢血により急逝した。享年77。(1855-1931)

1 明治(36)年 月3日 (17号)

拝啓、其後は御不沙汰に相過ぎ申訳無之候、御途中よりの書状四通御覧に入置候、第三の状に余り「ハワナ」⁽¹⁾を見せびらかせ候まゝ「ヌタ」⁽²⁾を以てからかひ候に、御返歌あり第四の状に見ゆ、小生の送りし「ヌタ」ハ

一、のどやかに ハワナのたばこくゆらして たびねやすらん ものおもひもなく

一、君がすふ たばこの煙 アルペンの 山かくすまで 立ちのぼるらむ

一、古里の ものゝ味ひ折にふれて 思ひいづらむ たびねをぞおもふ

一、世のさかの 闕みのそとに遊ぶ身は 心も広くなりやしぬらん

一、そゝや虎、市にいでぬと 花の如きベルリンをとめ にげまどふらん

[これはガクヤ落ちにて候御免下さるべく候]

早々以上

三日 夜

鶴所

青山様 御中

(1)「ハワナ」葉巻のブランド「ハバナ」か。

(2)「ヌタ」ウタの事か。

(注)本書簡は青山胤通が明治36・37年欧米視察時に発信されたものと思われる。

(賀古鶴所の書簡は次号に続く)

[主要参考文献]

朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994年11月30日発行

鶴崎熊吉編『青山胤通』青山内科同窓会 1930年5月8日発行

泉孝英編『日本近現代医学人名事典 1868-2011』医学書院 2012年12月5日発行

『会員氏名録』東京大学医学部鉄門倶楽部 2001年発行